

マタイによる福音書12章 「反対者による妨げ」

1A 安息日を巡る論争 1-21

1B 憐れみの行為 1-8

2B 良い行い 9-14

3B 言い争わない宣教 15-21

2A 聖霊を冒瀆する罪 22-45

1B 御霊による証し 22-30

2B むだ口 31-37

3B しるし 38-45

3A 霊の家族 46-50

本文

マタイによる福音書 12 章を開いてください。私たちは、イエス様の宣教において大きな分岐点に差し掛かろうとしています。天の御国を伝えていく中で、パリサイ派の者たちによる反対に遭いました。彼らこそが、ユダヤ人の宗教生活を規定する管理者とも言うべき人々でした。ユダヤ人に対して羊飼いであるべき人だったのです。けれども、律法と預言者に証しされているキリストご自身が来られました。天の御国が入ってきました。そして、癒しが起こり、悪霊追い出しが起こり、目に見えない人が見えるようになり、耳の聞こえない人が聞こえるようになりました。ところが、自分たちの律法の解釈に囚われている彼らは、その働きを真っ向から否定し、反対し、罪に定めようとしてきたのです。そこでイエス様が、彼らに対する裁きを宣告しました。13 章からは、イエス様の群衆に対するアプローチが変わります。「聞く耳のある者は聞きなさい」というように、ある意味で突っぱねて、物事を語られるようになります。心を頑くしていれば、それだけ聞くことができなくなるので、そうなっています。

1A 安息日を巡る論争 1-21

ところで、イエス様は弟子たちに、「すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。」と言われて、「わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」と言われました。先週の説教でお話ししましたが、私たちはとにかく、自分の責任が与えられ、それが主に命じられたことではないにもかかわらず、責任を果たすことが自己目的化して、自分自身に重荷を課している問題を話しました。まさに、これがパリサイ人たちに起こっている問題でした。彼らは、律法をどのようにして守るか、その解釈のしきたりを細かく確立してきました。その言い伝えを「ミシュナ」と呼ばれるようになります。それを守っていましたが、そこでずれが出てきたのです。守るためにいろいろなことを考え、行って、その規則を守るためにさらに何か規則を作り出し、がんじがらめになっていて、酷いのは自分自身だけでなく、他の人々にもそれを強要していったことです。

1B 憐れみの行為 1-8

1 そのころ、イエスは安息日に麦畑を通られた。弟子たちは空腹だったので、穂を摘んで食べ始めた。2 するとパリサイ人たちがそれを見て、イエスに言った。「ご覧なさい。あなたの弟子たちが、安息日にはしてはならないことをしています。」

イエス様と弟子たちは、安息日に歩いておられました。麦畑の中を通りました。そして弟子たちが、穂を摘んで食べ始めています。これは、よくあることで、穂を摘んで、それを手のひらで脱穀、殻を取って、こねていると弾力性が出て来るそうです。お腹を空かせていたので食べました。これは、全く律法になかったことです。申命記 23 章 25 節に次のような言葉があります。「隣人の麦畑の中に入ったとき、あなたは穂を手で摘んでもよい。しかし、隣人の麦畑で鎌を使ってはならない。」今の日本や世界の私有物の掟よりも、もっと緩やかですね。お腹が減った人が少し食べてもよいことになっていました。欲を出して、それに鎌を使ってはなりませんでした。

パリサイ人たちが、ここで彼らが穂を食べたこと自体を問題にしているのではありません。安息日にそれを行ったことを問題にしています。それは、彼らのしきたりに従えば、「働く」ことになったからです。ミシュナにおいて、安息日にはしてはならないこと、働いてはならないという律法について、その働くとは何であるかを三十九の掟がありました。その中に「刈り取り」や「脱穀」は働くこととみなしていました。そして、穂を摘むことは刈り取ることであり、手でもんで殻を取ることは脱穀することであるとパリサイ人は考えたのです。

3 しかし、イエスは言われた。「ダビデと供の者たちが空腹になったときに、ダビデが何をしたか、4 どのようにして、神の家に入り、祭司以外は自分も供の者たちも食べてはならない、臨在のパンを食べたか、読んだことがないのですか。」

イエス様は、彼らが律法の解釈者として権威を持っているので、聖書を持って彼らの矛盾を突かれました。ラビにおける議論は、相手が質問をしてくれば、質問によって帰します。イエス様は、彼らの尋問に対して、さらに質問で答えられています。第一に、ダビデの場合はどうなのか？ということですが。ダビデは、サウルが自分を殺す意図を強く持っていることを知って、逃亡生活を始めました。あまりにも急いで出て行かなければいけなかったのに、何も持っていませんでした。ダビデと彼に供していた者に対して、ダビデは祭司アヒメレクに食べる物はないか尋ねました。その時、ちょうど供えのパン、臨在のパンを取り替えたばかりでした。けれども、それは祭司たちが聖なる所で食べるものであり、最も聖なるものであるから祭司しか食べることができないものです。ところが、アヒメレクはそれを与えたのです。そして、ここで大事なことは、ダビデに対しても、また祭司に対しても、どこにもそれを咎める記述がないことです。弟子たちは、イエス様と共に宣教の働きをしていて、その時に空腹になりました。そして食べたのです。だから同じ状況です。

5 また、安息日に宮にいる祭司たちは安息日を汚しても咎を免れる、ということも律法で読んだこ

とがないのですか。6 あなたがたに言いますが、ここに宮よりも大いなるものがあります。

これは、彼らの解釈が一貫していないことを指摘するためのものです。安息日において、祭司たちがいけにえを捧げる規定が律法の中にあり、それが安息日においても行なわなければいけない規定があります。パリサイ人たちも、そのことは受け入れていました。ちょうどこれは、礼拝を捧げなければいけないとしても、奉仕をしている人々、たとえば私にとっては、最も動いていなければいけない日ですね。それと同じです。けれども、パリサイ人たちが厳密に安息日の規定を守ろうとすれば、その律法に違反しなければ守れないのです。彼らの解釈自体に、無理があり、一貫性がないのです。

そして、「ここに宮よりも大いなるもの」とイエス様が言われています。そうです、イエス様は神の宮よりも大いなる方です。ヘブル書3章で、著者が神の家に仕える者と、神の家を建てられた神ご自身との違いを話しています。「モーセが神の家全体の中で忠実であったのと同様に、イエスはご自分を立てた方に対して忠実でした。家よりも、家を建てる人が大いなる榮譽を持つつと同じように、イエスはモーセよりも大いなる栄光を受けるにふさわしいとされました。(3:2-3)」宮よりも大いなる方とは、実にその宮で礼拝を受けている神ご自身の独り子であるということです。イエス様は、ヨハネ2章でも、神の宮のことを「わたしの父の家」と呼ばれました。彼らは神を礼拝しにきたのに、イエス様は礼拝されている神と同一に置かれたのです。

7 『わたしが喜びとするのは真実の愛。いけにえではない』とはどういう意味かを知っていたら、あなたがたは、咎のない者たちを不義に定めはしなかったでしょう。8 人の子は安息日の主です。

イエス様は、さらに預言書を持ち出してパリサイ人たちの過ちを示しておられます。自分たちがいかに安息日を守っているのか？という捧げ物、犠牲に集中して、神が律法を与えられている目的、つまり真実の愛から離れてしまっているということです。パウロが、愛が無ければ無意味であると話した、コリント第一13章につながりますね。どんなに犠牲を払っても、自分の体を差し出して火で焼かれても、愛がなければ無に等しいのです。そして、彼らはその罪を犯していない弟子たちを犯したとして咎めました。イエス様は、「裁いてはいけません、裁かれないためです。」と山上の垂訓で言われましたが、その過ちを彼らは犯しました。

そして、「人の子は安息日の主」と言われました。パリサイ人には、安息日が主となっていました。しかし、安息日以上に大事なものは、安息日を定められた主ご自身であり、イエス様が安息日の主です。この目的が逆転しないように気をつけないといけません。私たちは、神とキリストを自分の箱の中に入れてようとする傾向があります。しかし、イエスは宮よりも大いなる方であり、安息日の主であります。これらの掟よりも、上におられる方です。だから、私たちはイエス様が、「わたしのところに来なさい」と言われた言葉に聞き従う必要があります。自分が何かを行なうよりも、何を行なうのかを命じてられているイエス様のところに来ます。

2B 良い行い 9-14

9 イエスはそこを去って、彼らの会堂に入られた。10 すると見よ、片手の萎えた人がいた。そこで彼らはイエスに「安息日に癒やすのは律法にかなっていますか」と質問した。イエスを訴えるためであった。

弟子たちを咎めたパリサイ人たちの会堂に、イエス様は入られました。すると、すでにイエス様を試すお膳立てをされていました。「片手の萎えた人」がいました。癒すのが律法にかなっているかどうか？ということですが、治療行為を行うのは働いているという解釈を、彼らは行なっていたからです。命の危険がある時は治療してよいが、そうでない時は、包帯は巻くかもしれないが、治療は次の日を待たないといけないとされていました。

ところで、ここで驚くべきことは、パリサイ人たちは既に二つのことをイエス様について信じていたのです。一つは、イエス様の力です。片手の萎えた人を癒すことができると信じているからこそ、その人を会堂に連れてきたのです。彼らにも、このことは明らかでした。イエスがはたして奇跡を行なうのか？という疑問を持つ人には、この箇所を見せればよいと思います。なぜなら、イエスの働きを否定したい人の筆頭はパリサイ人だったのに、その反対者が、イエスが癒されると信じていたのです。もう一つのことを信じていました、イエスはこの慈善を行われることです。憐れみを示されることを知っていました。イエス様が良い行いをするということ、憐れみを示される方であることを知っていたからこそ、片手の萎えた人を連れてきたのです。

11 イエスは彼らに言われた。「あなたがたのうちのだれかが羊を一匹持っていて、もしその羊が安息日に穴に落ちたら、それをつかんで引き上げてやらないでしょうか。12 人間は羊よりはるかに価値があります。それなら、安息日に良いことをするのは律法にかなっています。」

イエス様は、ため息をついておられると思います。マルコの福音書によると、ここでイエス様は彼らの心の頑なさを嘆き悲しまれていると書いてあります。弟子たちに対しては、空腹にならないように気をつけ、ここでは片手が萎えているのですから憐れみをかけておられるのですが、それをいちいち、安息日の自分たちの掟に沿っているのかどうか、試しているのです。主にあって行っていること、福音のために行なっているのに、余計なことをふっかけて試されることがありますね。

それで、イエス様はユダヤ教のラビのようにして、質問に対して質問で答えておられます。当時、狼を捕らえるために穴を設けていましたが、そこに家畜が落ちてしまうことがあります。ユダヤ教では一部の宗派を除けば、安息日にも家畜を助けてよいとされていました。そうであればなおさらのこと、安息日に人間に良いことをするのは、律法にかなっていると言われます。空の鳥についても、イエス様は同じように言われましたね。安く鳥が売られているのに、それでさえ神が空に飛ぶようにされているなら、なおさらのことあなたは神に気に掛けられているのだとイエス様は言われました。動物は、神によって造られた生き物ですからその生命は尊いですが、人は神の形に造られて

いるのだから、なおのこと尊いです。

13 それからイエスはその人に「手を伸ばしなさい」と言われた。彼が手を伸ばすと、手は元どおりになり、もう一方の手のように良くなった。14 パリサイ人たちは出て行って、どうやってイエスを殺そうかと相談し始めた。

この良い行いが、パリサイ人にとっては一線を越えたものでした。パリサイ人たちには、人を死刑にするような政治の力はありませんから、ここから何とかしてイエスを死刑にするにはどうすればよいか、あの手この手を使って試してきます。

3B 言い争わない宣教 15-21

15 イエスはそれを知って、そこを立ち去られた。すると大勢の群衆がついて来たので、彼らをみな癒やされた。16 そして、ご自分のことを人々に知らせないように、彼らを戒められた。17 これは、預言者イザヤを通して語られたことが成就するためであった。18 「見よ。わたしが選んだわたしのしもべ、わたしの心が喜ぶ、わたしの愛する者。わたしは彼の上にわたしの霊を授け、彼は異邦人にさばきを告げる。19 彼は言い争わず、叫ばず、通りでその声を聞く者もない。20 傷んだ葦を折ることもなく、くすぶる灯芯を消すこともない。さばきを勝利に導くまで。21 異邦人は彼の名に望みをかける。」

イエス様が、なぜご自分のことを人々に知らせないように、戒められたのか？それは、パリサイ人たちとの不毛な言い争いをしたくなかったからです。15 節に、「それを知って、そこを立ち去られた」とあります。イエス様が行なわれている宣教は、ここイザヤが預言したように、メシアの行なわれる宣教でした。父なる神に愛され、選ばれた、その召しに動かされ、将来的には異邦人にまで神の正しさが伝わるように動いておられました。その時に、言い争うことをしない、叫ばないということです。正しさを主張して、戦うことはしないということです。むしろ、不必要な言い争いをして、傷んでいる人を倒したり、くすぶる人を消し去ってはいけません。このような低姿勢というか、ご自分の召命に忠実な生涯を送られた後に、最終的に勝利をもたらします。

私たちが、はっきりと神の召しを確かなものにしなさいといけません。それは神に愛されているということを知っている召しです。そして、キリストの義の中に生き、それを伝えるという召しです。それを邪魔する要素というものは、沢山あります。イエス様の場合は、ご自分が憐れみと良い行いをしたいと願われているのに、それに対して妨げる議論が起こり、それに対してイエス様は対抗されませんでした。私たちは、いろいろな邪魔が自分の信仰の歩みの中にやってきます。そして、主が召しておられること、神の愛の中に留まることから逸らそうとしてきます。けれども、イエス様はそういったことから離れて、言い争いになることを避けられたのです。それで、ここにいる癒された人々にご自分のことを話してはいけませんと言われました。それを聞いたら、パリサイ人がまたもやとやかく言って来るからです。

2A 聖霊を冒瀆する罪 22-45

けれども次に、避けることのできない分岐点があります。

1B 御霊による証し 22-30

22 そのとき、悪霊につかれて目が見えず、口もきけない人が連れて来られた。イエスが癒やされたので、その人はものを言い、目も見えるようになった。23 群衆はみな驚いて言った。「もしかすると、この人がダビデの子なのではないだろうか。」

この前もお話したように、ユダヤ教の人たちは悪霊の追い出しも自分たちで行なっていました。その時には必ず、「お前は誰だ」とその悪霊の名を聞くのです。イエス様も、ガダラ人の住んでいるところで、その名を「レギオン」と聞きだされました。けれども、それができないのが、その人の口もきけないようにしていることです。もう神の介入なしにはどうしようもできないということです。そこでイザヤは、神の救いの到来、また神の国の到来として、「目の見えない者の目は開かれ、耳の聞こえない者の耳は開かれる。そのとき、足の萎えた者は鹿のように飛び跳ね、口のきけない者の舌は喜び歌う。(35:5-6)」と預言しています。ですから、ここで群衆が驚いています。聖書には、驚きが数多くあります。今まで前例がないことだという驚きで、そこには神が介在されていることを示しています。私たちは、そういった驚きが必要です。そして、「この人がダビデの子なのではないだろうか」と言っています。これが、まさにメシアではないだろうか？と言っていることです。マタイ1章1節でダビデの子、イエス・キリストとありますが、それはサムエル記二章にダビデ本人に約束された、メシアがダビデの世継ぎの子から来るというものです。

24 これを聞いたパリサイ人たちは言った。「この人が悪霊どもを追い出しているのは、ただ悪霊どものかしらベルゼブルによることだ。」

誰が見ても、イエスがメシアであることは明らかでした。もう反論の余地はありませんでした。イエス様はこれを後で、御霊によって悪霊を追い出したと言われますが、御霊による啓示です。イエス様を、誤解して、イエスは単なる人間にしかすぎない。ただメシアであると主張しているだけだ、ということではできません。その罪は赦されるのですが、もう絶対に反論することはできない、ただ、「その通りです、アーメンです」ということしかできない証拠は、御霊が残してくださいます。しかし、パリサイ人たちは、イエスの行なわれていることを、「悪霊どものかしらベルゼブルによる」としたのでした。ここで一人のパリサイ人ではなく、複数のパリサイ人たちと言っていますから、彼らは同意して、自分たちの立場では、イエスをベルゼブルの頭、すなわちサタンにしようとしたのです。ちなみに、ベルゼブルというのは、「ハエの主」という意味で異教の神のことですが、簡単にいうとサタンだということです。

25 イエスは彼らの思いを知って言われた。「どんな国でも分裂して争えば荒れすたれ、どんな町でも家でも分裂して争えば立ち行きません。26 もし、サタンがサタンを追い出しているのなら、仲

間割れしたことになります。それなら、どのようにしてその国は立ち行くのですか。

イエス様は、言い争うことをずっと避けていましたが、それはある意味で、彼らパリサイ人たちに對する憐れみであったかもしれません。彼らが、ご自身の奇跡を見れば見るほど、心を頑なにし、おかしくなっていくのが見えていたからです。けれども、明らかに神の御霊の働きであり、キリストご自身の働きであるものを、サタンの仕業と決めたところにはもう、戻りようのない分岐点を越えてしまいました。いつもよりも、長い言葉でイエス様がパリサイ人に語られますが、初めにサタンがサタンを追い出せるはずがないということを語られています。そこにいた人は悪霊につかれていたのです。悪霊のかしらが、悪霊を追い出せるはずがない。さもないとサタンの国は分裂してしまい、そんな愚かなことはしません。

27 また、もしわたしが、ベルゼブルによって悪霊どもを追い出しているとしたら、あなたがたの子らが追い出しているのは、だれによってなのですか。そういうわけで、あなたがたの子らが、あなたがたをさばく者となります。

これは、先に言いましたようにユダヤ教の中でも悪霊追い出しをしていたのですが、彼らもベルゼブルによって追い出していることとなります。すると、イエス様が裁くまでもなく、彼らこそがパリサイ人たちを裁くこととなります。

28 しかし、わたしが神の御霊によって悪霊どもを追い出しているのなら、もう神の国はあなたがたのところに来ているのです。

イエス様が悪霊を追い出されているのであれば、それは神の御霊によるのです。そして、神の御霊がおられるということは、そこに神の国が来ているのだと言われています。彼らは、ずっと拒んでいるのですが、彼らが待ち望んでいた御国は御霊によってもう来っていたのです。ところで、これはイザヤの預言にあり、神の国が来る時には、「わたしの霊をあなたの子孫に、わたしの祝福をあなたの末裔に注ぐ(44:3)」とあります。終わりの日に御霊が注がれて、御国が立てられます。ですから、完全な御霊の働きの現れは、イエス様の再臨を待たねばなりません。けれども今、御霊が注がれ、私たちにもその一部が与えられ、そこにおいて神の国が広がって来るのです。

29 まず強い者を縛り上げるのでなければ、強い者の家に入って家財を奪い取ることが、どうしてできるでしょうか。縛り上げれば、その家を略奪できます。

ここでイエス様が語られている強い者とは、サタンのことです。イエス様が強い者であるサタンを裁かれることによって、そこで虜にされている者たちを解放することができるということです。イエス様が、十字架で死なれ、甦られたことによって、サタンの頭をご自分の足で打ち砕かれました。サタンは生きていますが、決定的に支配力を失いました。だれでもキリストの内にある者は、この世の悪い者に打ち勝つことができるのです。

30 わたしに味方しない者はわたしに敵対し、わたしとともに集めない者は散らしているのです。

イエス様は、霊の戦いの本質を表しています。今、見たようにイエス様は天の御国を宣べ伝えて
いる中で、激しい霊の戦いを展開しておられることが分かりますね。戦いというものは、中立とか
中庸というものはありません。イエス様に従い、この方を主とするか、あるいはイエスに敵対しなけ
ればいけません。どちらでもない、ということはありません。イエス様のことは尊敬するが、
距離を置いてこの方を主としないとするのであれば、結果的に自分は敵陣のところにおいてイエス
様に敵対していることと変わらないのです。

今では全米に伝道集会を開いて、神に用いられている伝道者グレッグ・ローリーさんは、十代の
時に元ヒッピーの伝道者の説教を聞いて、救われました。その伝道者は、「あなたはイエスに対し
て味方か、敵のどちらかではありません。」それを聞いて、びっくりしたそうです。自分はイエスに
積極的に付いて行っているわけではない。けれども、敵対しているとは思っていなかった。けれど
も、積極的に主としていないのであれば、敵対者なのだ。」と分かりました。それで、自分が神とキ
リストに反抗し、敵対していることを知ったそうです。それで十字架に付けられたキリストによって、
そこにある神の和解を受け入れました。

2B むだ口 31-37

31 ですから、わたしはあなたがたに言います。人はどんな罪も冒瀆も赦していただけますが、御
霊に対する冒瀆は赦されません。32 また、人の子に逆らうことばを口にする者でも赦されます。
しかし、聖霊に逆らうことを言う者は、この世でも次に来る世でも赦されません。

午前礼拝の説教を聞いてください、人の子、イエス様を冒瀆したとしても赦されるのですが、聖霊
によって示される時、つまりイエス様が間違いなく救い主なのだということを、確証をもって、心の中
に与えられた時に、それでも拒むのであれば永遠に赦されないということです。過去にどんなこと
を言ったり行なったりしていても、それは神を知らない時でした。けれども、本当の意味で神を知
り、イエスが誰であるかを知ったのに、それでも理不尽に受け入れないのであれば、心が頑なにさ
れ、ついに信じられないほどに麻痺してしまうという警告であります。

33 木を良いとし、その実も良いとするか、木を悪いとし、その実も悪いとするか、どちらかです。
木の良し悪しはその実によって分かります。34 まむしの子孫たち、おまえたち悪い者に、どうして
良いことが言えますか。心に満ちていることを口が話すのです。35 良い人は良い倉から良い物
を取り出し、悪い者は悪い倉から悪い物を取り出します。

イエス様は山上の垂訓で、偽預言者に注意なさいと言われた時に、この話をされました。実
によって判断なさいということです。表面的には、口でごまかせる部分があります。偽預言者は、い
ろいろその場ではよいことを言い、正しいことを言います。初めから、間違っていることを言ってい

るわけではありません。けれども、結局なのです、結局、その人の行ないや言葉によって心にある本当のことが出てきます。バプテスマのヨハネが、彼らを見て「まむしの子孫たち」と言いましたが、事実そうではないか、とイエス様は言われています。人々に毒を与え、滅ぼすようなことを言っているということです。そして、心を良い倉、また悪い倉と言っています。心が正しくなければ、必ず口から、また行いからそのことが出てきます。ですから、私たちは表面的に繕うのではなく、心からの一新、清めが必要なのです。人に対して良いことをする以前に、神の前にありのままの自分の姿で、自分の心を注ぎだすのです。

36 わたしはあなたがたに言います。人は、口にするあらゆる無益なことばについて、さばきの日に申し開きをしなければなりません。37 あなたは自分のことばによって義とされ、また、自分のことばによって不義に定められるのです。」

言葉がいかに大切であるかは、ヤコブがここのイエス様の言葉を意識して語っていました。「舌は火です。不義の世界です。舌は私たちの諸器官の中にあつてからだ全体を汚し、人生の車輪を燃やして、ゲヘナの火によって焼かれます。(3:6)」ですから、言葉による罪について、私たちは真剣に悔い改めないといけないということです。三浦綾子さんの本の中に書いていたことを思い出しますが、人の物を盗んだことによって、それがばれたら窃盗罪で捕まります。けれども、その盗まれた人の心はとても痛みますが、自殺しようとは考えないでしょう。けれども、中高で陰で悪口を言われていることを聞いて、それが心に残って、ついに自殺をしたということはよくある話です。けれども、その悪口については罪に問われません。しかし神は公正な方であり、人には裁くことのできないことも、人の裁きには限界があるけれども、言葉について確実に正しく裁かれます。

3B しるし 38-45

38 そのとき、律法学者、パリサイ人のうちの何人かがイエスに「先生、あなたからしるしを見せていただきたい」と言った。

パリサイ派だけでなく、律法学者も来ました。彼らは、もうすでに、徴は数多く与えられているのです。それでも求めているのです。ここで、徴が問題なのではなく、次にイエス様が言われる心が問題になっています。

39 しかし、イエスは答えられた。「悪い、姦淫の時代はしるしを求めますが、しるしは与えられません。ただし預言者ヨナのしるしは別です。40 ヨナが三日三晩、大魚の腹の中にいたように、人の子も三日三晩、地の中にいるからです。

イエス様は、この時代を「悪い、姦淫の時代」と言われています。これはかなり、辛辣な呼び方です。これまでも「時代」という言葉が使われて、信仰によって反応し、応答しない時代を嘆いておられました。しかし、姦淫の時代と言えば、それはバビロン捕囚前の偶像礼拝を行なっている時代と

ということです。その時に、靈的にまことの神ではない偶像と姦淫の罪を犯していました。そこからの帰還によって、彼らは心から悔い改め、偶像礼拝をしなくなったのです。ところが、時を経て、物理的には偶像礼拝はしていませんが、心があまりにも遠く神から離れており、姦淫の罪を犯しているのと同じであると言われていました。そして、かつてバビロンによって裁かれたように、今度はローマによって裁かれることをも予告しているのです。

そしてヨナの徴というのは、もちろんヨナが海に投げ込まれて三日間、大魚の中にいたことです。これは型となり、イエス・キリストが三日、墓に葬られて、それからよみがえることを表しているものです。つまり、イエスがメシアとして証言する出来事は、ユダヤ人たち一般には復活だけしか残されていない、ということです。復活が彼らに対して、最後の、そして最大の徴になります。私たちに、信じるための徴は与えられますが、究極的には、イエスが三日目に甦られたということを知るによって、救われます。

41 ニネベの人々が、さばきのときにこの時代の人々とともに立って、この時代の人々を罪ありとします。ニネベの人々はヨナの説教で悔い改めたからです。しかし見なさい。ここにヨナにまさるものがあります。

ヨナが預言した時、ニネベの人が聞いたのはこれだけの言葉でした。「あと四十日すると、ニネベは滅びる。」けれども、彼らはたったこれだけの言葉で、神を信じて、断食を呼びかけて、粗布をまとい、その横暴な行いから立ち返ろうとしたのです。そんな言葉でさえ悔い改めることができるのに、数多くの言葉と徴が与えられているのに、それでも悔い改めていないのです。しかも、これは預言者ヨナの世界ではありません。ヨナよりまさるもの、そうです預言者以上のキリストご自身がおられるのです。

42 南の女王が、さばきのときにこの時代の人々とともに立って、この時代の人々を罪ありとします。彼女はソロモンの知恵を聞くために地の果てから来たからです。しかし見なさい。ここにソロモンにまさるものがあります。

南の女王とはシェバの女王のことです。今のイエメン、アラビア半島の南部にその王国の遺跡があります。女王は、ただ一度、ソロモンのところに謁見しただけで、そこにある栄華を見て、イスラエルの神をほめたたえました。その前に、ソロモンに神がおられるという噂を聞いただけで、ものすごい長い旅をしました。ですから、今の時代の人々、パリサイ派や律法学者の生きている時代において、その時代の人々が裁きます。「何を、しるしを言っているのか？あなたがたの心が、神から遠く離れているのだ」と。

ここで大事なことは、イエス様が敢えて異邦人の例を取り上げておられることです。ユダヤ人は自分たちがアブラハムの子孫だということで自動的に神の国に入れると思っていました。しかし、そ

んなことはないということを言われています。彼らの肉の誇りを今、粉々に砕かれているのです。私たちも、どれだけ御言葉を聞いたのか、どれだけ経験をしたのかということで、誇ってはいけないのですね。果たして実を結んでいるのか、わずかな知識でもそれに信仰によって応答しているのかどうか問われているのです。

43 汚れた霊は人から出て行くと、水のない地をさまよって休み場を探します。でも見つからず、
44 『出て来た自分の家に帰ろう』と言います。帰って見ると、家は空いていて、掃除されてきちんと片付いています。45 そこで出かけて行って、自分よりも悪い、七つのほかの霊を連れて来て、入り込んでそこに住みつきます。そうすると、その人の最後の状態は初めよりも悪くなるのです。この悪い時代にも、そのようなことが起こります。」

イエス様は、実際の悪霊を追い出される時に起こっていることを例に出して、その時代のイスラエルが悪くなっていくことを預言されています。悪霊を追い出す時に、まだイエス様を心に受け入れて信じていないと、もっと悪い状態になることがあります。ここに書いてあるように、悪霊は、自分の住むべきところを探すからです。レギオンが豚に乗り移ったことを思い出してください、霊のまま浮遊することを苦痛としています。もし家主がいないと悪霊が戻って来るので、まずイエス様を心に受け入れてもらうということをしします。

このような悪霊追い出しから、その時のイスラエルがそうになってしまうと言われるのです。イエス様が悪霊を追い出されておりました。そこに神の国がやってきておりました。けれども、肝心のキリストを受け入れません。きれいなだけで、家主がいなかったらどうなるのでしょうか？七つの他の悪霊を連れてきます。七ということですが、レビ記 26 章で神が厳しい裁きを行なわれるときに、さらに七倍にして懲らしめるという言い回しがあります。それを意味しているのでしょう。徹底的に、悪い状態になってしまいます。紀元 70 年、キリストのおられない神殿は、ローマによってことごとく破壊され、民は世界中に散り散りになってしまいました。

3A 霊の家族 46-50

次、46 節は、登場人物ががらっと変わります。これまで、パリサイ派と律法学者に対してイエス様がお語りになり、そうした宗教という家、あるいは共同体では人々は救われないということを見て行くことができました。それは、しきたりであり、自分たちに重荷を課している、自己流の教えに従っていたものであり、私たちも同じような過ちを犯しえないことを見ました。イエス様のところに行くという、関係の中に生きることの必要性を見ました。しかし 46 節において、イエス様の肉の家族が出てきます。宗教というものも一つの家を作っていましたが、もちろん肉の家族は、もう一つの家です。皆さんからも、一人一人から家の事情や状況を伺っていますが、肉の家族があり、そこに一つの家があります。肉の家族や家が、私たちの信仰とどのような関わりがあるのかを見ます。

46 イエスがまだ群衆に話しておられるとき、見よ、イエスの母と兄弟たちがイエスに話をしようと

して、外に立っていた。47 ある人がイエスに「ご覧ください。母上と兄弟方が、お話ししようと外に立っておられます」と言った。

イエス様が御言葉をお語りになっている時に、イエスの母と兄弟たちがイエス様に話そうとしていました。イエスの母、そうです、マリアのことです。彼女はかつて、カナの婚礼において、「ぶどう酒がありません」と言った時に、「女の方、あなたはわたしと何の関係がありますか。(ヨハネ 2:4)」と言われたのです。その特別な母と子の関係でイエス様に霊的につながろうとしたことを、イエス様は突っぱねられました。私たちには、いろいろな肉の関係があるでしょう。血縁関係もあるかもしれないし、長い付き合いというものもあります。それはそれでとても大事です。イエス様は、母をないがしろにはせず、十字架の上でヨハネにマリアの世話をすることをお願いされました。テモテ第一にも、肉の家族を扶養することをパウロは教えています。けれども、そのつながりをもって、霊の家の中には入れないということです。

そして兄弟たちがいますが、彼らはイエスの後にマリアとヨセフの間に生まれた、半兄弟と言ったらよいでしょう。イエス様は、マリアが処女の時にお生まれになったのに対して、他の兄弟たちはヨセフとマリアの間で生まれているからです。彼らが信じていなかったことは、ヨハネ 7 章を見ると分かります。

48 イエスはそう言っている人に答えて、「わたしの母とはだれでしょうか。わたしの兄弟たちとはだれでしょうか」と言われた。49 それから、イエスは弟子たちの方に手を伸ばして言われた。「見なさい。わたしの母、わたしの兄弟たちです。50 だれでも天におられるわたしの父のみこころを行なうなら、その人こそわたしの兄弟、姉妹、母なのです。」

イエス様は、父のみこころを行なう集団を、新たな家族とされました。これこそが、神の家族であります。ですから、私たちにとって何が大事なのか？父のみこころを行なうこと、礼拝をすることです。イエスさまがあがめられ、この方から聞き、そして父のみこころを行なうところに、そこに霊の家族があります。いかがでしょうか？私たちは時にパリサイ人たちのように、自分で自分の規則を作っていないでしょうか？宗教をやってしまっていないでしょうか？また、肉のつながりを霊のつながりよりも、大事にしていないでしょうか？私たちは、ここで共に礼拝しています。そしてイエス様に語られたことを、そのまま互いに実践します。主のことばを聞いて、それを行おうとしている中にあるその絆が、他の絆よりもはるかに優れているのです。13 章では、たとえばイエス様が語られる所が出てきますが、群衆にはたとえて、弟子には明らかに語られます。私たちが、群衆のままなのか、それでもここでイエス様が、自分の母、自分の兄弟たちと言われている、その神の家族の中に入っているのか、考え、祈ってみてください。